

京都女大家政 笹辺美和子

〈目的〉 家庭の養育機能の低下が指摘される昨今、たとえば伝統的な直系家族から近代的な夫婦家族への移行に伴い、家庭内での高齢者の教育力に期待を寄せられない状況がある。近代的小家族といわれる今日のいわゆる核家族は、とりもなおさず老人核家族的世帯の発生を促してきたわけであるが、そこには高齢者の家庭教育力を無視あるいは回避している側面がある。しかしながら、豊かな時代に生れ育った現代の若い母親たち加ほとんど無縁に打ち過ぎようとしている「子どもへの真の祈り」「手づくりの育み」など、子育てに関わる最も素朴な営みについて、今、我々は身近な高齢者から学んでおかなければならないのではないだろうか。そこで本研究では、高齢者(今回は60歳以上の婦人を対象とした)に対して実施した、自分が子育ての現役であった頃の自身の育児態度を回想する様式の意識調査の結果に基づいて、高齢者の家庭教育力を再びみ直し今日の家庭教育に生かすべき条件を探ることを目的とする。

〈方法〉 東京池上H寺院に参詣の高齢者(女)及び大阪千里NTS老人センター月例老人講座受講の高齢者(女)を対象(計286人)に、上記目的に則って作成したアンケート調査を実施。調査期日は昭和62年10月~12月及び昭和63年9月。有効回収率は両所計44.1%(126名分)に留まった。

〈結果〉 子どもをほめながら育てようと努めていた者、年長者の教えをよく参考にして育児をしていた者の比率の高さ。育児から早く解放されたいと望んでいた者の比率の低さなどが特徴的であった。また伝統行事や祈りに関しても、子育ての一環としてそれらを重視してきたことを示す結果を得た。